第3種郵便物認可　南日本

人いきいき

時代読んで品種を選択

果樹苗木生産

竹﨑　哲司さん(34)
出水市高尾野町大久保

「先を読み、農家が求める苗木を生産したい」と話す竹﨑哲司さん

畑一面が、かんきつ類の葉で濃い緑色に染まっていた。温州ミカンやデコポン、タンカンなど約五十品種の苗木を農家に供給する。県内で五軒しかない果樹苗木生産業者だ。「農家は一度植えたら三十年は使う。品質が第一」と強調する。

県立農業大学校卒業後、一年間の修業を経て就農。昨年一月、父親から経営移譲を受けた。

苗木の生産は、台木となるカラタチの種子をまくところから始まる。二年育てたあと、根元を切って接ぎ木し、さらに一年以上育てる。接ぎ木のほか、わきに出る芽のつみ取り、農薬散布など人手や手間のかかる作業も多い。年間生産量は約八万本に上る。

「常に先を読まないといけない」と感じている。苗木の出荷までにかかる時間は最低三年、農家が果実を出荷するまでにはさらに数年が必要。それまでに時代が変化し、消費者の需要も変わるからだ。

「品種の主流は変わってきた。イヨカンがすたれたのがいい例」と説明する。県内ではデコポンが増えた。愛媛県などでは近年、「せとか」が人気という。

「どういう品種に需要があるのか、農家が何を植えたがっているのか」を考え、農家とも積極的に交流し情報を得ている。最近では母親が始めた「農業体験塾」を手伝い、消費者の関心にも目を向ける。

就農後間もなく、将来性を見込んで取り組んだのがマンゴーの苗木生産。読みが当たり、生産農家はここ数年で増えた。試行錯誤しながら、今では年間七百―八百本を生産するまでになった。ただ「生産技術が難しく、まだ思うようにはできていない」と技術向上に余念がない。

果樹の苗木の出荷量は、全盛期と比べて減少しているという。消費量減や価格の伸び悩みで、ミカン農家の後継者減少が目立つ。

「農家が植えてもうかってもらい、消費者においしく食べてもらいたい」。その思いを満たす苗木作りを目指すつもりだ。

（政経部・児美川勝）

チップボイラーの年間燃料費は七百五十万円と、灯油式の六割弱まで低減した。

間伐材を使う燃料用チップ製造は、林業側にもメリットをもたらした。種子島森林組合の上薗幸夫組合長えておかないと、せっかくの資源が無駄になる」と梶山主任研究員はいう。温泉や施設園芸などで熱需要の高い鹿児島は、エネルギー転換の可能性を秘めた地域といえるのかもしれない。

温

河内温泉センターて
＝西

科へ入学した。

「生物生産系列」の特色る。徳之
基幹作物
学」では
化一貫技
美農業学」
樹などを
培されて
学習して

琉　将士さん